

## 講座「表現の技術」開設にあたって

土木学会誌編集委員会

技術者は社会との接触が多い。特に土木技術者の場合一層その感が強い。しかも相手がいわば不特定多数的であることが多く、その接触は慎重を要することが多いといえよう。患者に接する医者は、単に専門的知識と学術的な経験のみでは片手落ちであることはいうまでもない。おそらく今日の時代においては、医者には人間心理から社会病理に至る幅広い教養と正義感が要求されているとあってよい。社会と接することの多い土木技術者の場合も、本質的には同様なことがいえるであろう。ただ土木技術者の場合は、相手が個人個人であるよりは、むしろ一般大衆であったり、特定の地域集団であったりする点の特徴であるといつてよい。そこにPRの技術、説得の技術の必要な理由があると考えられる。

土木技術は元来、民衆のため国民福祉のための公共事業を重要な柱としているはずである。そこで、その事業計画から目的、工程に至るまで地域住民に十分説明し理解してもらうための努力を惜しんでならない。しかも、その努力とは単に精神的なものではない。現代の複雑な社会構造と、戦後の意識革命を経た民衆を考慮するとき、その努力の裏づけとして、住民への表現の技術、交渉の技術が要求されていると思われる。

欧米のダム、ビル、道路などの工事現場を訪ねれば、そこに一般見学者へのPRが懇切丁寧になされていることに気づく。なかにはあまりに機械的な、もしくはサービス過剰と思われるのも見られるが、PRの方法も受け取る側の心理、要望度によって異なるであろうから、一概に批判もできまい。要は一般へのPRの熱意や態度がわが国とはかなり開きがあるということである。だいたいPRという外来語自体、まことに翻訳しにくいコトバではないか。いうまでもなく、翻訳しにくいということは、そのような概念もしくは認識が従来わが国にはあまり無かったことだといつてもいい過ぎではあるまい。

とりわけ、公共事業の場合は戦前からの親方日の丸の姿勢が完全に払拭されたわけではない。それが、現在の公共土木事業におけるPR技術の拙劣さの遠因になっているとさえ見ることができる。それが多くの土木技術者の表現の技術への無関心、幼稚さと無関係ではあるまい。しかし、そのことのために現場や計画担当の多くの

土木技術者が一般からの正当な理解を受けずにどんなにか苦闘していることであろうか。また土木技術者の仕事の内容や意義が社会から正当に評価されていない面がいかに多いことか。そのために、土木技術そのものが一般社会からややひずんだ形で眺められることもあるし、土木技術者の活躍分野を狭めている感さえある。土木技術者意識のなかには、いまなお黙々として働くことを美德とする古い感覚が潜み、それが仇となっていなければ幸である。

アメリカの大学土木教育のカリキュラムのなかには、public speaking とか technical writing が課せられる例が増しつつある。そこには、アメリカが各民族の集合のために言葉の問題で特に苦勞しているという背景が一方にはあるとはいえ、技術者への表現教育の重要性の認識が強く存していることは贅言を要しない。

コトバもしくは表現をことのほか重んずるフランスでは、小学校から大学まで各学期末試験で、筆記試験と口述試験の両方を課するのが原則である。特に正確に明瞭に話すことの重要性が強調されている。ここでは、各人の専門知識に関しても、正確に話して相手に伝えることが重視される。換言すれば、専門業績でも、会話によって相手に理解してもらえなければ評価されないほどである。

研究者や教育者が、論文にせよ口述にせよ学会や講義などを通して発表するに当たっても、表現の技術はもっと練られなければならない。この面での表現技術も、いままで述べてきた土木事業の一般社会へのPR技術と無関係ではない。とかく土木技術は学校においても、論文とか討論の発表技術を従来は本格的に教育されていなかった。そのためもあるって、社会へ出てからも表現技術に無関心なのではあるまいか。土木技術がその高い社会性の故に、もっとも強く表現の技術を要望されているにもかかわらず、現状は決して満足すべき状態ではない。たとえば、機械学会とか物理学会での投稿論文規定とか、そこに提出されている論文の文章を読むならば、残念ながら土木学会は、表現の技術において一步を譲ると思われる。ここに土木学会誌においても、従来の概念からすれば異色な講座“表現の技術”を開設し、会員諸士の関心

を換起したいと思う。表現とは、文章、話し方、各種記号はもとより、PR技術などについても考えて見たいと思う。たとえば映画、スライド、写真などを一般への啓蒙もしくはPRとしてどのように利用するか。これらはまた学校教育においても、今後は視聴覚教育が当然盛んになる趨勢にもかんがみて、新たな観点から検討されるべきであろう。

技術の国際化とともに、表現の技術においてもまた国際性への要求が高まりつつある。国際会議に出席してもロクに討論もできず観光旅行の成果のみ実らして帰国するというような話は、もはや昔の語り草としたい。日本人にしか良くわからない英語論文ともそろそろお別れしたい。欧米への留学生も従前とは比較にならぬほど増している。それらの実績を踏まえて、その機は熟しつつある。ただそれを自然の成行きにまかせず、できることなら組織的に前進させたい。本講座でも扱おう英語論文についての小論がそのキッカケとなれば幸である。

本講座で扱う内容は、とても細かい点までは困難であろう。表現の技術なるものが体系化されているわけでもないし、学会誌としても始めての試みであるので、大方の関心と呼び、種々の批判、注文を頂ければ、編集者としては満足である。またその項目にしても、本講座で触れ得ない分野にも多くの問題点があると思われる。講座の予定としては考えていないが、公共事業計画の地元への説明の仕方とか、工事中、その工事内容、目的、進行状況などの一般への報知技術、事故や災害時の状況説明の方法、ジャーナリズムへの要望なども、表現の技術の重要な側面であるに違いない。

表現の技術も、ひとつの技術である以上、簡単に取得できるものではあるまい。附焼刃の発想は逆効果さえもたらしかねない。土木事業の社会性が今後一層高まってゆくと予想される現在、われわれは常日頃“表現の技術”について真剣に考えねばならない時期にきたようである。

## -----講座「表現の技術」予告-----

第1回	技術論文の書き方・その1	第52巻第10号	島田 静雄 (名古屋大学)
第2回	技術論文の書き方・その2	第52巻第11号	島田 静雄 (名古屋大学)
第3回	技術論文の書き方・その3	第52巻第12号	福田 武雄 (東大名誉教授)
第4回	英文論文の書き方・その1	第53巻第1号	合田 良実 (運輸省)
第5回	英文論文の書き方・その2	第53巻第2号	合田 良実 (運輸省)
第6回	講演・発表の仕方	第53巻第3号	鈴木 雅次 (日大名誉教授)
第7回	印刷・校正の仕方	第53巻第4号	事務局編集課
第8回	写真の使い方・写し方	第53巻第5号	鈴木 忠義 (東京工業大学)
第9回	スライドの使い方・つくり方	第53巻第6号	佐藤 貞一 (運輸省)
第10回	映画の使い方・写し方	第53巻第7号	三宅 政光 (田無工高)

(標題その他、予告なく変更することがございます)

## 第22回年次学術講演会講演概要集ご希望の方へ

去る5月27、28日の2日間広島大学において開催されました第22回年次学術講演会講演概要集の残部がありますので、ご希望の方は代金に送料をそえてお早めにお申込み下さい。

第I部門：応用力学・構造力学・橋梁等 187編	頒価 750円 (〒150円)
第II部門：水理学・水文学・河川・港湾・海岸・発電水力・衛生工学等 191編	頒価 750円 (〒150円)
第III部門：土質力学・基礎工学・土木機械・施工等 168編	頒価 700円 (〒150円)
第IV部門：鉄道・道路・コンクリートおよび鉄筋コンクリート・土木材料・都市計画・空港・測量等 198編	頒価 750円 (〒150円)

申 込 先：東京都新宿区四谷一丁目 土木学会本部

または

広島市上八丁堀6番30号・建設省中国地方建設局企画室内 土木学会中国四国支部